

# かまにし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

## 第58号

現在、大田区では形式や規模の違いはありますが、多くの小学校がサマーワークショップを開催しています。平成十二年から今年で第十六回を数える矢口小学校は、その先駆けであり、今年七十六ものワークショップ



中央が大橋さん

エプロン掛をかけた大勢の子どもたちが、きな粉あめ作りに励んでいます。真剣に取り組んでいる態度が伝わってきます。矢口小学校サマーワークショップ会場の一コマです。指導をしているのは大橋裕子さんと「ゆうの会」を応援してくれる大勢の仲間たちです。

### わがまちの顔 サマーワークショップの一番人気・きな粉あめ作り 大橋 裕子さん と仲間たち

が開かれました。ワークショップは学校の授業と異なり、保護者、地域、近郊の高等学校や企業、各種団体等の協力を得て、異なる学年の児童が一緒に学び、各ワークショップで学び、遊び、体験しながら、いきいきと自己表現の発表に挑んでいます。

数あるワークショップの中でもきな粉あめ作りは、子ども参加者が一番の人気ワークショップです。一回の定員は四十二人ですが、会を重ねるたびに希望者が増え、一日開催から二日間へ、そして現在は三日間の開催となっています。過去三年間では参加児童の延べ員数はおおよそ一四〇〇人となりました。

「きな粉あめ」作りを簡単に言えば、三温糖ときな粉を混ぜ合わせた中へ、湯煎にかけた水飴を流し込み、こね合わせて棒状に伸ばし、冷め加減を見て小さく切り分け、きな粉をまぶして出来上がりです。

以前、原材料の水飴を特別に安価で提供してくれていたスーパが撤退してしまい、困り果てたことがありました。製造元の明治屋に直接、

事情を訴えた結果、活動が理解され、格安に水飴を供給してもらえらるようになりました。いろいろな苦労もあったようですが、

多摩川一丁目に住む大橋さんは、一家の主婦であるとともに、親族が経営する空調関連会社の事務、経理を担当し、家事と仕事に追われる日々を過ごしています。

「ゆうの会」は、もともと手話ダンスサークルで、義理の母に誘われ参加するようになり、現在は、会員の高齢化のため、慰問活動等は思いのままでいかなくなり、また、リーダーの平野先生は現在もお元気で同じワークショップで子どもたちに手話ダンスを指導しています。

「こねる、混ぜる、練る、丸める、伸ばす、切る。大人から見れば単純な手作業のように感じますが、真剣に話を聞き、一生懸命チャレンジしている子どもたちの姿を見ると、毎回のことですが、やってよかったと嬉しさがこみ上げてきます。持ち帰ったきな粉あめが会話のきっかけになり、一家庭から役に立てばと思っています。義理のお母さんともども、元気のうちは続けていきたいです。」

今年で連続十三回目、三日間の大仕事を終えた大橋裕子さんは語ってくれました。

(取材 都築委員)



大ホール 歌舞伎『神霊矢口渡』



新田義興ゆかりの地ウォーキング

本紙第四十七号で紹介した浄瑠璃『神霊矢口渡』がきっかけとなり、平成二十七年九月二十七日(日)に、大田区民フラザで『矢口の渡・歌舞伎』を開催されました。

大ホールでは歌舞伎『神霊矢口渡』を中心に全五公演、小ホールでは地域の皆様様々な活動から至七公演、展示ホールではパネル展示五コーナー、ブース二、新田義興ゆかりの地ウォーキング一回、矢口小学校の渡し船展示等盛りだくさんの内容を皆様披露しました。

当日の参加者数は、総来場者数約千名(内訳:歌舞伎観劇者四百五十一名、ウォーキング参加者五十四名、他)となりました。

ポスターデザインは地元元日本工学院専門学校に依頼したところ、迫力満点の作品が仕上がりました。

そして、展示ホールでは本紙「かまにし17」のブースを出展し、創刊号から最新号までの展覧等を行いました。また、ブースにてアンケートを行いましたので、以下結果を掲載します。

#### 「かまにし17」アンケート結果

あなたのお住まいは?.....(蒲田西地区11、矢口地区3、六郷地区1、区内2、その他1)  
今回の催しを何で知りましたか?(町会からのお知らせ14、大田区報6、かまにし17:4、ポスター2)  
特に関心があったものは?.....(歌舞伎15、民謡6、和太鼓4、ウォーキング3、かまにし17:2他)  
かまにし17ブースについて(展示品:大変良い10、良い6他 案内人の説明:良い9、大変良い6他)  
これからも続けてほしいですか.....(次回も続けてほしい12、内容を精査して続けてほしい7)  
ご意見(とても面白かった。来てよかった。頑張ってください。発表が素晴らしい。大ホールの司会者が良かった。このようなことがあったのかとびっくりした。楽しく読んでいる。地域の伝承を紹介してほしい。地域のことがわかり面白い。矢口渡者を販売できなければ図書館で読みたい。地域のことが良くわかる他)

#### 蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,805人
	女	29,366人
	計	61,171人
世帯	34,138世帯	

平成27年11月1日現在

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七十一番五  
(三七三)四七八五



日本工学院専門学校様ご協力  
イベントポスター

# 環八「蒲田陸橋」の誕生

## 昭和三十六年五月

環八とは？

東京都道三二一号環状八号線は、東京都大田区羽田空港から、世田谷区、杉並区、練馬区、板橋区を經由して北区赤羽に至る環状（実際には計画当初から半円状）の都道（主要地方道）です。路線名は、本路線の都市計画道路事業名である「東京都計画道路幹線街路環状第八号線」に由来します。

この道路は一般に「環状八号線」（かんじょうはちごうせん）、「環八通り」（かんぱちどおり）、「環八」（かんぱち）と呼ばれます。最高制限速度は概ね時速六十キロメートルです。

環八の起点・終点・総延長

起点：大田区羽田空港三丁目  
終点：北区岩淵町  
総延長：約四十四キロメートル

※都道「環状八号線」の路線認定上の起点は大田区羽田空港三丁目ですが道路区域の起点は穴守橋東

その日現場にいた一人の記録から

東京都計画幹線道路で最も外周を巡る環状第八号線は羽田国際空港の稲荷橋北を起点とし大鳥居、糀谷、京浜蒲田駅南を経て矢口、武蔵新田から西北に向かって

この計画のうち、第一京浜国道から西新蒲田二丁目までの道路工事は昭和三十二年度から工事が施行され、すでに完成していたが、この区間中、最も難関は東海道線との立体交差であった。国電蒲田付近は前期の東海道本線をはじめ、湘南線電車、横須賀線電車、国電京浜東北線が通過しており踏切は終日ほとんど閉め切りの始末、三十分一回か、一時間に一回、数分間開くのがやつのありさまであった。環八の道路完成には、この踏切の立体交差が焦点でありこの線を境に交通渋滞を来しているのを緩和するのが最大の目的で、第一に着工したのであった。ここでは国鉄線を立体交差するため、線路際の東西橋台までに坂を設け、盛土して架線等待っていた。この場所は新潟鐵工所の工場内であったが、この坂道のため分断されていた。本橋の設計は昭和三十三年頃に始められ、同年中に終わっていた。

詰です。

沿革

元々の構想は東京市が一九二七年（昭和二年）に発表した「大東京道路網計画」に含まれており、当初から現在の東京二十三区の西側半周のみを結ぶ計画でした。しかし実際には着工らしい着工はされないまま、ところどころルート上の既存の道路を「環状道路」に指定した程度で、戦時体制に入り計画はほとんど凍結されました。

戦後、改めて都市計画決定されたのは一九四六年（昭和二十一年）三月の「戦災地復興計画方針」においてですが、その後も瀬田交差点（世田谷区）を挟むわずかな区間の既存の道路が拡張された程度で実際に本格的に着工されたのはそれから十年後の一九五六年（昭和三十一年）、着工後も実際の施工は遅々として進みませんでした。

同時期に構想計画された環七通りや産業道路が一九六四年（昭和三十一年）の東京オリンピック

橋桁（はしげた）を作ったのは……

そして鋼桁の製作、組立は田町にある「鉄骨橋梁株式会社」が請け負っていた。設計当時の建設局橋梁課長、尾崎義一氏は、その後退職して、この鉄骨橋梁株式会社も自己が設計していたが、奇しくって建設することになった。

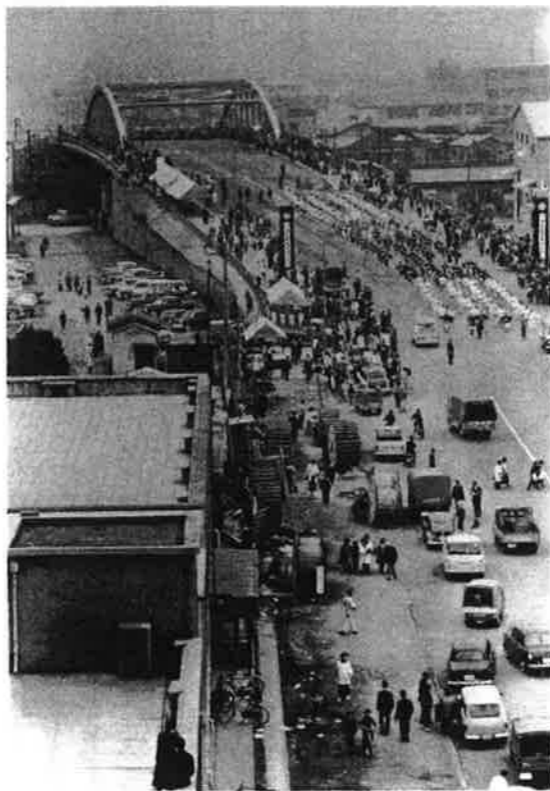
昭和三十五年十一月初めから、現場において組立が始められた場所は架設地点東側の道路上であった。盛土した坂道の上に続々と鋼材が運び込まれ、部品が積上げられた。

この組上げられたトラスを東橋台から西橋台に向かい微動させつつ架設する計画であった。架設は国鉄の動脈、東海道本線上空であるが、列車の運行を止めて実施するわけにはいかず、午前一時過ぎの最終電車の運転が終わってから開始し、午前四時過ぎの始発通過までの時間内に架設する計画であった。

昭和三十六年五月一日、午前一時三十分に架設を開始した。このような大トラスをあらかじめ組み立てておき、曳き出して架設していく工法は、当時としては初めてで、東京はもとより全国各地から百余名の見学者が殺到した。

関連工事とされ速やかに着工されたのに比べると当時の沿線は交通需要が小さく後回しとされたのである。

## 昭和37年と現在の蒲田陸橋



蒲田陸橋開通式の様子（昭和37年）  
※写真：大田区広報課提供



現在の蒲田陸橋

多くの見学者の前で……

十数燈の照明灯が点じられた。国鉄軌道間に二か所仮橋脚を建て、徐々に曳き出しが始まった。もし途中で事故が起きれば、日本の幹線鉄道が止まることになるだけに、関係者は慎重のうえにも慎重に工事を進めていった。見学者は固唾を飲んで見守っていた。作業は順調であった。

午前四時、第一日の工程を予定どおり終えた。第二日（翌二日）は、午後十一時から開始し、午前四時、架設を全て終了した。夜中はもとよりであったが、明るくなって付近を見ると、関係者以外に一般見物人が西側の道路に黒山になって見物していた。

架設は無事終わったとはいえ、附帯工事に約一箇年を費やした。一般の通行開始は昭和三十七年四月であった。

この橋は「蒲田陸橋」と命名され、その後、東海道線で二分されていた付近の人々及び通行者は非常に便利を感じている。

（自叙伝「私の人生」大良美雅 後編百九十八〜二百ページ 昭和五十五年五月完成）  
（上三段は上記手作りの書籍から孫の大良美臣が書き写したもので一部読みやすく修正しました）

ここからは孫が書きます

私（編集委員）は昭和三十一年生まれですので、環八陸橋の架設の時には家にいたと思います。四歳ですから全く覚えていません。でも、祖父が書いた自叙伝を読むと、その場にいた人でなければわからないような内容にドキドキします。

きっと祖父も現場でドキドキしながら見守っていたのでしょう。私が矢口東小学校に入学した時は近くに環八はまだ通ってはいませんが、なぜか友だちの何人かが引っ越してきました。

彼らの家は壊され、広い道路ができ、大人が「環八」と呼んでいました。

「こんなに広い道路が本当に必要なのだろうか」と思いましたが、今考えると「もっと広くても良かったかも」と思います。

環八のおかげで矢口渡商店街は分断され、まちの形が少し変わりました。

でも、その他の点では、あまり大きくは変わらない、そんなこのまちが、私は大好きです。

（取材 大良委員）